

名古屋城 天守金鯱 過去と今

朝日 美砂子

キーワード

名古屋城 天守 金鯱 修理 盗難 接収 復旧 湯島聖堂 山下門内博物館 ウイーン万国博覧会 徳川慶勝 ガラス乾板 茶釜
はじめに

名古屋城天守の金鯱は、名古屋城の象徴として知られている。その伝歴は、修理や盗難、明治政府への貢献、ウィーンをはじめとする各博覧会への出展、天守への復旧、そして第二次世界大戦最末期の空襲による炎上など、まさに波乱万丈であり、鯱について記す江戸期の文献や近代公文書、図面、絵画、写真類が多数存在する。焼失後の金鯱についても、鱗残骸の焦土からの収集、進駐軍による金片接収、そして返却された金塊からの純金製茶釜制作など、さまざまな逸話がある。よって金鯱の歴史を記述しようとすると、事跡を追うばかりの「鯱物語」に陥りやすい。よって本稿は、「現状変更」・「所在場所変更」・「所有者変更」を軸として変遷を追うこととし、伝聞引用をさけ、典拠がある事跡のみの記述にとどめる^①。また鯱の語源や天守にのせる意味については考察しない。瓦鯱から金鯱への変遷や他城の鯱との比較も行わない。

鯱の表記は、鴟尾、鴟吻、鯱鉾など複数ありそれぞれ江戸期から用いられてきたが、本稿では鯱に統一した。

創建時の金鯱、戦後再建された金鯱について、簡略な対象表を表1としてまとめた。

現存する金鯱の鱗の遺品を、表2とした。ただし成分分析などの最新

の調査結果は含めていない。

文献、図面、印刷物（錦絵・刷物）、写真などの資料は、表3にまとめた。精度の観点から肉筆画や文芸作品の大半は収録していない。

表4として、金鯱に関する簡略な年表を作成した。

なお、江戸時代後期からすでに天守北側に位置する北鯱を雄、南側に位置する鯱を雌とする見方があり、幕末には夫婦とも見なされてきたが、本稿では北鯱・南鯱の呼称で統一する。

一 現状

―― 1 現状の概要

名古屋城の金鯱は、昭和二十年（一九四五）五月十四日の空襲により天守とともに焼失した。しかし、複数の鱗類が金庫に納められ封印されて名古屋城に伝わり、現在名古屋城総合事務所が所蔵し名古屋城内の収蔵庫で保管されている。それら鱗の遺品は二群に大別できる。

① 空襲前に金鯱本体から脱落し、あるいは盗まれ、その後再収集された鱗断片およびその関係資料。被災していない。

② 空襲で被災した後、天守周辺の焦土から拾い集められた鱗断片および金属塊。表裏ともに焼けただれた被災痕がある。

さらに、近年の発掘により名古屋城内から出土した金色の破片が複数あり、③に分類する。

①・②・③の写真と基礎データについては、本研究紀要所掲の酒井論

文を参照されたい。

③が金鯢鱗の破片である証拠はないが、①・②との比較から鱗と推定できる。詳細は本研究紀要所掲の村上・大西論文を参照されたい。ただ、いずれきわめて薄い金板であること、にもかかわらず表裏で金の色味が明瞭に異なること、それらを含めた外見が②のうちの一部に極似することとを特記しておきたい。

①・②については一覧が「特殊財産台帳」と題された一綴（名古屋城総合事務所蔵）に収録されており、概要・収集状況と日時、重量などが付記されている。収集状況とは、名古屋城内のどこで見つかったかの記録で、現存する鱗遺品の属性を考える上で重要な情報であり、文献や写真、図面との照合から、信じるに足ると本稿筆者は考えている。

表1は、「特殊財産台帳」の記載順に、現存する鱗①・②をまとめた。①・②全点を撮影した集合写真は、酒井・村上論文口絵1として掲載されている。

各資料の収集状況と概要・属性は密接に関連するため、以下、「特殊財産台帳」に沿いつつ各資料の概要を述べる。

被災痕のない①のうち、盗難品の関係資料とされる一号、二号、十八号、十九号は、昭和十二年に北鯢鱗の表面金板が盗まれた事件に関わるもの。北鯢盗難と修復については詳細な記録（後述）があり、国宝調査の一環として天守に掛けられていた足場を利用して、夜間天守屋根上に登った者により北鯢鱗五十八枚から表面の金板がはぎとられた。金板は溶かされ延棒として売却されたが、間もなく犯人が逮捕され金塊と残片が没収された。その金を用いて金板が新規に作られ、天守の鯢に貼り直された。金の余りで作られたインゴットや、検査に用いた金板の残滓な

どが上記の四資料であり、すべて北鯢に由来する。とくに「フエキ糊」のガラス小瓶に封入された四号は、数mm角の金片や小鋳で、鋳で切断されたあとが明瞭に残る。色は黒変しており、金色というより暗い銀色に近い。なお、試験管入りの二号は破損の恐れがあり未開封である。

北鯢金盗難八年後の昭和二十年三月二十五日、連合軍による焼夷弾攻撃の峻烈化を受け、本丸御殿障壁画と天守の鯢を避難させるための準備工事が裁可された（同日付名古屋市決裁）。実際の避難作業については、朝日新聞東京版四月二十四日朝刊に、「明日から勝利の日までしばらくさよなら」云々の記事があり、四月二十五日に取り下ろし作業が開始されたことがわかる。本丸御殿障壁画の避難もその頃かと考えられる。

「特殊財産台帳」によれば、三号・四―一号―六号の七点は、取り下ろし作業の過程で南鯢から外れた鱗であり、確かに火災の痕は表裏ともにない。ただし、このうちの四―四号は、戦後の昭和二十六年九月四日、天守東側の土中から発見された鱗で（中日新聞同年九月六日朝刊・朝日新聞東京版同日朝刊）、名古屋城管理事務所により南鯢の鱗と比定されたものである。

南鯢の引き下ろしがほぼ終わった同年五月十四日、早朝からの焼夷弾攻撃に天守はさらされ、屋上に残されていた北鯢は全焼した。二十五日の取り下ろし作業開始から二十日後であった。

地上に置かれていた南鯢は全焼を免れ、終戦後、天守跡地に散乱していた鱗類が採取された。それらは、同じく焼失を免れた東南隅櫓で保管されたが、昭和二十一年、進駐軍により接収された。五号から十一号までの六点には、「亜米利加軍二接収ノ際隠匿シ置キシモノ 昭和二十一年六月」と「特殊財産台帳」に記載され、表裏ともに激しい被災痕があ

る。よって、名古屋城管理事務所（当時）職員が進駐軍から隠匿したため接収を免れたものとなる。北鯨は空襲で全焼したため、六点はすべて南鯨の鱗と考えてよい。

接収後にまとめられた「金鯨残塊返還関係書類」（名古屋城総合事務所・名古屋市政資料館蔵・詳細は後述）によれば、占領軍が接収したのは鱗及び鉛・銅・金が融解して固まった金属塊であり、その量は石炭箱十三箱にのぼった。現存する①・②の鱗は、ほぼ完全な姿をとどめる三号・十二号を含め、小型金庫一つに収められてきた。よって石炭箱十三箱の鱗とは、現存の十倍ないし二十倍の枚数となる。驚くべきことに、南鯨の鱗の大部分が拾集されていたのであり、しかもその大半は接収され、接収された金鯨鱗は実は二度と名古屋城には戻らなかった。この顛末は本稿最後で述べることにする。

十二号・十七号、二十号・二十一号は、「特殊財産台帳」によれば終戦後に天守周辺で発見されたもので、昭和二十年四月の南鯨取り下ろし作業中に剥がれた南鯨鱗か、空襲直後の採取作業で見落とされた南鯨鱗、あるいは戦前烏に啄まれるなどして飛散した鱗片（北鯨か南鯨かは不明）と考えられる。

このうち十三・十六号、二十号・二十一号は、名古屋市茶封筒に封緘されており、令和五年、金鯨鱗分析調査の過程で数十年ぶりに開封した。中には銅の支持体を欠く微細な金片のみが入り、金鯨遺品とは一見断定したい。しかし、空襲以前の金鯨を知っていたであろう名古屋城関係者が金鯨残滓と判断したのであり、その判断に今異を唱える根拠もない。翻って、近年の出土資料である③も、ほぼ同様の外見であるところから、金鯨残滓である可能性が高い。

一―2 外見所見

これらの資料について、目視による外見の所見を記しておく。なお成分分析は全点につき行っており、分析者によりその結果が発表されることになっている。

基本的な構造は金に銀を混ぜた合金薄板を、銅の基板に載せ、多数の小釘か小鋲で留めるといふもの。小釘類の大半は欠落しているが、一部は残存する。また大半の鱗に、表の金板から裏の銅基板まで貫通する直径5mm程度の釘穴が複数あり、鱗を芯材（真木）にのせ表から釘を打ったと思われる。釘はすべて脱落しているが、戦災以前に名古屋市が撮影したガラス乾板写真（図1北鯨 図2南鯨）から、釘頭には円形と四角形が混在し径もさまざまであったことが知られる。なお基板がほぼ純銅でその上の薄板が金銀の合金であることは、平成二十九年（二〇一七）に名古屋市工業研究所が行った蛍光エックス線分析でも明らかである。

形状は、鯨の部位により当然異なるが、昭和実測図やガラス乾板写真との比較により、台形状の大きな鱗（五号・七号）は蛇腹と呼ばれる腹の部分と判断できる。片側のみ直線的な鱗（十号・十一号）は背鰭に接する部分の鱗で、円筒を半分に割ったようなもの（三号・十六号）は鰭の鰭条（きじょう・骨）である。また小さな断片である四―二号・四―五号・四―六号・十二号は、尾鰭などの先端部と考えられる。

周辺部（端）の処理の方法としては、周囲の一边を1mm程度の幅で大きく表側に折り上げ、もう一边を2mm程度の幅で表側に折り上げ、残りの二辺は基板とほぼ同寸にするもの（五号・七号）、周囲の一―二辺を1mm程度の細い幅で表側に折り上げ、他辺は銅の基板とほぼ同寸にするもの（六号・八号・十一号）、周囲の全てを2mm程度の幅で裏側に折り曲

げるもの（三号・四―二号・四―三号・四―五号・四―六号・十二号）の三種類にほぼ分類できる。

周囲の全てを裏側に折り曲げるものは、いずれも鱗先などの小片である。鱗以外のいわゆる鱗については、上側の鱗の下端が下側の鱗の先端に重なっている様子が焼失前のガラス乾板写真に写っており、下から上に鱗を重ねて貼っていたことが知られる。いうまでもなく雨水や風損に耐えるためで、さらに下側の鱗の上辺を折り上げその上から次の一枚を貼り重ねることにより、水の浸透を防いだと推定される。

五号と七号は、一辺の折上げ幅が格段に広い上、金板ごと折りこまれているため、内側部分（谷部分）にも金板がある。五号・七号の折り上げの解釈については酒井論文を参照されたい。

六号・八号・十一号は、折り上げ幅が少なく、構造的には脆弱である。

全周囲を裏側に折り曲げるもの（三号・四―二号・四―三号・四―五号・四―六号・十二号）は、他の部位により周囲が覆われる部位と考えられ、この仕様であつてもさほど支障はない。このうち四―五号は、昭和二十年の南鯨避難作業中に落下したものとされ、鱗の一部と考えられる。今回の調査で、裏面に、「年十月於博物館修造之」「五之内」と読める薄い刻銘があることが判明した。上部が切断されているため「年」の上は存在しないが、「博物館」とは、明治四年（一八七二）三月、文部省博物館により湯島聖堂（元昌平坂学問所）に置かれた博物館、あるいはこの博物館が明治六年三月内山下町に移転した山下門内博物館のことと考えられる。

後述するように鯨は、明治四年六月に名古屋から皇城（皇居）に搬入され、明治五年早々にはウイーン万国博覧会への出品が決まった。明治

五年三月から湯島聖堂で北鯨が展観される一方、南鯨は同五年末から翌六年の一月頃にかけて、内山下町の旧島津藩の庭（のちの山下門内博物館）に移され、二月にはウイーン博覧会に向けて出港した。ウイーンから帰国後は絶え間なく各地の博覧会に展示されており、修理のための時間も博物館当局が直すべき債務もない。よって刻銘の「十月」とは、明治五年十月で、ウイーン万国博覧会への出品に向け修理された可能性がある。

折り曲げ方法や外観が四―五号に類似する四―二号・四―六号・十二号も、同時期の博物館当局による補作の可能性があるが、成分分析の結果を受けて総合的に判断すべきであるので本稿では断じない。

表面の色は鱗により大きく異なり、五号と七号はとくに金味が濃い。六号・八号・十一号は、銀色味が強い。この銀色味が濃いグループのうち四点の裏側に一見浅いひっかき傷のように見える漢数字が彫られており、左記のように読める。

六号「一九」、八号「五十七」、十号「三十五」。十一号「三十四」か。字体は丁寧とはいえず、修理時に貼り直すための番付と考えられる。ただし修理がいつかは特定できない。

被災状況としては、五号と七号は、表面の金板に無数の皺と破れが生じ、銅基板から遊離しかけている。六号・八号・十一号は、表面の破れがなく平坦で、一見堅牢に見えるが、実際にはきわめてもろく、基板の銅板との間に空洞がある。銀の含有量が多い場合被熱すると硬くなる傾向にあるとされ、六号・八号・十一号の見た目の色味と硬さには相関関係が見いだされる。

このように、被災した鱗遺品の構造、色目、表面外観は、五号・七号とそれ以外に二分でき、五号・七号が総じて贅沢な仕上がりであることがわかる。かかる相違は、過去の修理や移動、すなわち所在場所や現状の変更と連動することが想像できる。

現状の概要説明に文字を費やしてしまったが、上記の相違を念頭におき、以下各時期の変更について述べ、現存遺品に創建当初の鱗が含まれるか否か、また修理時の鱗とすればいつの修理のものを推定する手掛かりとしたい。

二 江戸期の現状変更 ― 修理

二―1 創建および享保の修理

鯢に関わる慶長期、すなわち天守創建当時の記録は皆無である。ただし、修理記録類を総合したと思われる『編年大略』享保十一年（一七二六）の記事に「総体檜木に而作り上を鉛に而包其上を唐銅に而包又金に而苔を附る也」などあり、真木を鉛で包み、銅板を貼りさらに金の苔、すなわち金の鱗を貼る構造であったと知られる⁵⁾。ただし、銅板に金を貼る方法はわからない。一方、三代將軍家光が寛永十五年（一六三八）に造営した江戸城天守の立断面図とされる東京都立図書館蔵「江戸城御本丸御天守百分ノ一建地割」に、江戸城金鯢に関する以下の書き込みがある。

寛永十五年七月十三日辰之時御柱立穴蔵

同月二十七日初重御柱立

十月二十六日鵠吻ヲ上ル 同十一月五日金子ニ而包ム

すなわち、江戸城金鯢は、鯢本体を天守に上げてから金子、すなわち金の貨幣で包んだという。金の太判や小判を加工して鱗にしたという解

釈もあり得るが、現実的ではなく、金子とは何らかの方法で金を加工した鱗のこととしておく。いずれにせよ、本体を屋根の上に揚げてから金の鱗を貼ったことは確かで、名古屋城金鯢も同じように屋根上で鱗を貼ったと考えられる。

創建後の大きな変更は、享保年間と文政年間の大規模な修理で、各修理記録から、修理仕様が知られる。

まず享保の修理について述べよう。

『編年大略』・『尾藩世紀』には享保十一年（一七二六）の項にのみ鯢修理の記載があるが、寛文九年（一六六九）から元文五年（一七四〇）までの名古屋城内建造物の修理履歴をまとめ天守に常置されていた木製銘板の写しが、「御天守ニ有之候看板之写」として、徳川林政史研究所蔵「国秘録」や名古屋城総合事務所蔵「金城録及び付図」などに収録されている。本銘板から、享保の修理は鯢のみならず天守各層について行われた大修理で、享保十一年にまず南鯢が修理され、享保十五年にあらためて北鯢が修理されたことがわかる。すなわち、享保十一年八月上旬から天守修理が始まり、十二月下旬に終了した。天守五重目の破風鬼板、懸魚、鰭、釘隠などの銅板を作り直し、また南鯢の頭を仕直し、背筋の鰭の下方も作り直し、在来の箇所と継ぎ合せた。真木（芯材）を取り替え、頭部を巻く鉄板を下り棟にとめた。真木を鉛板で包んで鋳を打ち、その上に銅板・金を着せ、漆を付けて鋳打した。上下の鰭はかすがいで締めたという。

頭と背鰭の下方の鱗を作り直したとあるから、鱗をいったん全て取り外したが、頭と尾鰭の一部以外は再利用したと考えられる。ただし新規に作られた頭と尾鰭の鱗の品質に関する記載はない。

特筆すべきは、「御天守二有之候看板之写」に修理に携わった金細工師の名が記されていることである。

「御天守二有之候看板之写」は、各修理に携わった作事奉行や大工頭らの名を列挙しており、享保十一年修理においては「御瓦師 斎賀六左衛門 御左官 早川平助」に引き続き、再末尾に一字下げて「鋳屋 六左衛門」と記している。六左衛門は「鋳師」ではなく「鋳屋」で、苗字もない。彼については、本稿末尾で述べる。

南鯨を修理してから四年後の享保十五年（一七三〇）、四月下旬から十二月上旬にかけ、北鯨の修理が行われた。北鯨の頭、胴、尾ともに元のごとく新規に作り替えた上で、鰭を取り付け、筋鉄物を打ち、糸で締めて真木へ取り付け、頭部の巻鉄を下り棟へ筋鉄で取り付け、所々を木屎漆で埋めた。下地は鉛板で包み鋲釘を打ち、上に銅板と金を着せ、漆を付け鋲を打ち、鰭は糸で締めた。鯨下の鬼板・鰭も作り直し、さらに四年前に修理した南鯨の足元を金で包み、両鯨共に鳥除（おそらく尖った棒）、南北鯨の修覆がすべて完了した。これらの修理を担当したのが、やはり「御鋳屋 六左衛門」であった。

頭、胴、尾を作り替えたという記載から、芯材が交換されたことは明らかである。鱗を作り直したか否かは記述がなく、南鯨と同様、当初の鱗と新規制作の鱗が混在したと考えられる。

この後の宝暦年間、名古屋城天守の石垣を半ば解体し傾きを直すという大工事が行われる。ただし修理過程を詳細に記す諸記録に鯨に関する記述はなく、次の金鯨修理は、文政九年（一八二六）に開始され同十年に完了した。

二―2 文政の修理

文政修理の仕様については「御天守鯨木地仕口寸尺之図」一綴（図3）が名古屋城に伝わり、その写本が宮内庁宮内公文書館と名古屋城に所蔵され、また尾張藩土奥村得義が著した名古屋城百科事典ともいうべき大著『金城温古録』の天守編末尾にも写し置かれている。ただし、『金城温古録』には名古屋城蔵本や宮内庁蔵写本にはない得義の私見が書き加えられている。『金城温古録』の翻刻本（『名古屋叢書続編 十三巻』）では、原本にある記載なのか単なる得義の添書かは区別できず注意を要する。

「御天守鯨木地仕口寸尺之図」は、文政十年（一八二七）閏十月、鯨修理について芯材（真木）の仕口（継ぎ方）を中心に尾張藩作事方がまとめた調書で、鯨の寸法や真木を図解しており、真木と巻鉄を更新したことが知られる。鱗に関する記述はないが、文政修理で少なくとも北鯨頭部の鱗が貼り直されていることは、昭和十二年（一九三七）の北鯨鱗金板盗難事件時に作成された損傷箇所拓本（名古屋城総合事務所蔵）の内の一葉に、下記の文政時修理銘が採拓されていることから確かめられる（図18）。

文政九年丙戌九月

北鯨御修復取掛り

戌二月吉日出来

同

同後

同吟味方

御大工

本拓本は、北鯨頭部の銅板に彫り込まれた修理銘の拓本と考えられ、人名らしき文字もあり、文政十年二月の北鯨修理完了後、鯨の頭部という最も広くまた重要な場所に修理銘を刻したとみなされる。

また、徳川林政史研究所蔵「尾州御留守日記」文政十年正月十四日条に、「天守鯨修復につき、下御庭から見上げる機会を作事方が設けようとしたが、人が多く中止にいたった」という記事がある。鯨修理完了に向け、外からの見栄えを確認しようとしたと考えられる。

一方、『金城温古録』掲載の「御天守鯨木地仕口寸尺之図」写本においては、奥村得義が下記の私見を添えている。⁷⁾

「享保の修理時、金を薄く打ったため、おおいに悪しく、文政ではさらに薄く打ったため、約十年で早くもめくれるようになり、さらに銀をだいぶん混ぜて打ったため、性あしくなった」。すなわち、享保修理で金を薄くし、文政修理では金を薄くしたばかりか銀を大量に混ぜたというのである。

この得義私見を受け名古屋市編『名古屋城史』(昭和三十四年発行)は、修理自体が金板を吹き直して金を取り出し藩の財政に入れるためであったとし、この説が今や定説化し流布している。しかし、「御天守鯨木地仕口寸尺之図」は、当初両鯨を修理する予定はなく、実地調査後修理することになったと記しており、あくまでも保存措置のための修理であったことが知られる。よって、鯨修理目的を藩財政の改善と決めつける『名古屋城史』の説の根拠はない。一方、現存する鱗に色や構造が異なるものがあることは確かである。ここから、鱗修理は財政難のためではなくあくまでも鯨保存のため行われ、傷んだ鱗のみ補作交換され状態のよい鱗は再利用されたと考えられる。ただし補作された鱗は、『金城温古録』

の説のように、厚みを減じ銀の割合を高めたものであったと考えられる。

二―3 弘化・嘉永の修理

『名古屋城史』には、弘化三年にも金鯨を修理したという記述があるが、その典拠は示されず、詳細は不明であった。

しかるに、尾張藩大道寺家の用人で奥村得義の朋友であった水野正信(一八〇五―六八)が記した膨大な見聞書である名古屋市蓬左文庫蔵「青窓紀聞」⁸⁾に、弘化三年の修理に関わる記述があり、加えて嘉永四年の修理をも記している。以下、幕末期のこの二回の修理について述べる。

弘化三年の修理は、「青窓紀聞」卷三十二で左記のように記される。

正月尾の御天守鯨両方共足代懸る是ハ文政八酉年真木朽候付大修復有之候處僅廿餘年にしていかなる故そとくに真木の故障ハ無之金の着せ方不宜候故にめくれ落候事之由去巳年掃除中間之内金をひろいて其筋へ出さずして売拂候由これらの事によりて今御修復急になりしか

弘化三年正月、天守に足場をかけ両鯨に修理が行われた。文政修理からわずか二十余年後の修理であり真木の交換はなされず、金がめくれ落ちた部分の修理であった。落ちた金を届け出なかった掃除中間がいたため急ぎ修理したという。

これに加えて、鯨についての戯作ともいべき長文が「青窓紀聞」にある。借金のかたに鴻池家に行けという厳命を受けた鯨夫婦が、家康以来の家格なのにと嘆き、いっそ堀に飛んで身投げしようとし雌鯨が提案し、雄鯨が「近來の御修復から色が悪いと評判あしくなっているのに、堀で死んだら笑われる」と答えるもの。この戯文から、弘化三年の時点で、

鱗の品質の低下は城下の人皆知るところであつたことが確かめられる。

ついで「青窓紀聞」巻四十二・嘉永五年（一八五二）の項に左記がある。

○尾城金鯢真木御修復アリ又

御本丸御天井向御張付向追て御修復の事あり

鯢真木を修復した、さらに本丸御殿の天井貼付も修理したというのである。嘉永五年に鯢の芯木が修理されたという記事は本件しか現時点では知られないが、「青窓紀聞」巻四十には嘉永三年から本丸御殿の襖絵類を部屋毎に修理したという記事があり、現存する重要文化財本丸御殿障壁画の下貼から出た修理銘と一致する。そもそも水野正信が仕えた大道寺家は城代をしばしば勤め名古屋城修理に深く携わっており、嘉永五年に鯢を直したという記録の信憑性は高い。

このように、享保・文政の二度にわたり大修理が行われ、弘化・嘉永にも修理が行われた。傷んだ鱗は新規のものに交換され、その時には、従来の金板に銀を加えて吹きなおした鱗が用いられたと考えられる。

ただし、江戸期における鯢への変更は、いわゆる現状変更のみであった。

明治維新後、鯢は所有者変更と所在場所変更を余儀なくされる。尾張藩主が「無用の長物」として鯢を国に献上したことで知られる鯢外し・鯢戻しの一件であり、すでに触れたこともあるが、名古屋市蓬左文庫所蔵「明治四年 雑記録」中の「鯢貢献」に詳細な記事があるので、その紹介を兼ね触れておきたい。¹⁰⁾

三 近代の所有者・所在場所変更

三―1 明治の貢献・復旧

明治三年（一八七〇）十二月十日、名古屋藩から太政官弁官にあて、「名古屋城天守の金鷲尾は無用の長物であるため、金を剥し御用にたて、城内の建物は逐次取り毀し修繕費を省きたい」という伺いが出された。当時の名古屋藩知事は尾張徳川家十四代の慶勝（一八二四～一八三三）で、病弱であつた子の初代名古屋藩知事義宜（尾張徳川家十六代・一八五八～七五）にかわつて十二月三日に二代藩知事に就任したばかりであつたが、鯢貢献の主体者であつたと考えられる。

鯢貢献は、十二月十二日には「伺之通」となり、その旨大蔵省に弁官から通達された。¹¹⁾

名古屋市蓬左文庫蔵「鯢貢献」によれば、名古屋藩の土木担当者間でまずお祓いの是非が議論となり、熱田神宮・三之丸天王社・名古屋東照宮等の神官による神事が行なわれた。次いで「全形のまま」で天守から降ろし東京まで運ぶ手法と経路が検討され、ようやく翌明治四年五月半ば「全形のまま取り除く」ことができる見込みとなり、大きさと重さから東海道による陸路ではなく海路を用いることになった。この時点で頭と尾の金板が一部なかったが、そのまま六月十日知多丸に乗せ熱田を出港し、同十七日「藩邸」に「荷揚げ」された。藩邸とは江戸浅草瓦町の徳川邸のことで、隅田川に面して船付場もあり、船での輸送には適していた。

翌日、いつどの経路で皇居（旧江戸城）に搬入するかの伺いを名古屋藩から太政官弁官にたて、見物人が集まり混乱を極めたため早々に移すこととし、六月二十二日、浅草御門から馬喰町を経て和田倉御門を通り

皇城（旧江戸城）に納めた。この日をもって金鯢の所有者は名古屋藩から国に移り、所在場所も旧名古屋城から皇城に移ったのである。

留意すべきは、鯢貢献伺書が鱗を剥ぎ取るかのように記すのにかかわらず、名古屋藩側は「全形のまま」から降ろし全形のまま輸送することが大切と繰り返ししていることである。全形のままとは、鱗や鰭を外したり胴体を分割したりしない意味と考えられ、慶勝の内々の意であった可能性もある。当時は「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方」（いわゆる廃城令・明治六年一月発布）により名古屋城が存城に分類される以前の段階で、天守の行末も混沌としていた。鯢を差し出した背景には、鯢だけは助けたいという意図が隠されていたのかもしれない。

三―2 博覧会への出品・天守への復旧

皇城に移ったのちの数年間、鯢の所在場所は変わりつづける。

明治五年（一八七二）、鯢をウイーン万国博覧会に出品することが決定され、プレ企画である湯島聖堂での博覧会（現東京都台東区・会期三月十日～四月三十日）に北鯢が公開された。翌明治六年三月、内山下町に山下門内博物館（現東京都千代田区内幸町、帝国ホテルのあたり）が設置され、北鯢は館内で常設展示された。明治六年五月一日から始まったウイーン万国博覧会（会期十月三十一日まで）には、南鯢が出品された。出品に先立ち、明治五年十月南鯢が博物館当局により修理され、その鱗が現存する四―五号と考えられることは先に述べたとおりである。修理箇所が尾の先であったことも「尾の先に金板がなかった」とする「鯢貢献」の記録と一致する。

他の出品作品は輸送船ニール号の沈没によって失われたが、鯢は別便

に乗せられ、翌年無事東京に戻った。その後名古屋東掛所（東本願寺・会期明治七年五月一日～六月十日）・金沢博覧会（兼六園内東別院・明治七年六月十六日～七月三十一日）、京都博覧会（仙洞御所・明治八年三月一日～六月八日）などにほぼ切れ目なく出品された^⑫。

各博覧会を宣伝する錦絵や出品目録において金鯢は大きく図示されており、いわゆる目玉であったことが知られる。しかし名古屋側はそれによしとせず、鯢復旧にむけて動き出す。

明治十一年（一八七八）六月十日「金鵄尾復旧の伺」が「愛知県下有志之人民」の意を受けた名古屋鎮台司令長官・陸軍少将四條隆調から陸軍卿山県有朋代理・陸軍少輔大山巖にあてて提出された^⑬。同年七月二十日、復旧はすみやかに聞き届けられた。十月には両鯢が名古屋に到着し、明治十二年二月、天守に揚げられた^⑭。

この鯢復旧の仕掛人の一人が、名古屋城下屈指の大商人伊藤次郎左衛門であった。嘆願書も次郎左衛門が草したらしく、例の「無用ノ長物」を皮肉たつぷりに挿入した文案が同家に伝わる^⑮。

鯢復旧完了後に揮毫され名古屋城に納められたのが、名古屋城総合事務所蔵「金鯢復旧銘板」（図4 写真は裏面）で、同じように「無用の長物」の文言を引き名古屋藩旧藩主への嫌味を込めつつ、移転経費一切を市民有志で負担し復旧を完遂したことを記している。この銘板制作にも伊藤家に関わった可能性が高いが、記された関係者三十五人の筆頭は、名古屋鎮台司令長官四條隆調であった。四條隆調とは、先の復旧伺い書を弁官に提出した名古屋鎮台の幹部筆頭に他ならない。四条以下、工兵第三方面第一団区長飛鳥井雅世など陸軍軍人三名が続き、愛知県と名古屋区の長や官吏、商人、職人の順に名を記される。すなわち、鯢復旧を

根回しし経費を負担したのは伊藤家ら有力町民であったが、名目上の指揮者はあくまでも名古屋鎮台であった。勘ぐれば、名古屋城に着任したばかりの名古屋鎮台にとり、天守で輝く金鯢は欠くべからざるもので、東京から金鯢を取り戻すのは名古屋の老舗の面々を掌握するためにも間違いない良策である。山下門内博物館としても開帳が一段落した金鯢にさほどの未練はなく、であるからこそ金鯢は異論なく名古屋城天守に戻ったのである。

ただし、金鯢および天守が国所有であることには変わらない。明治十二年二月の鯢復旧とは、金鯢が宮内省管轄の御物ではなくなり、名古屋鎮台所管の建造物たる天守に戻ったことを示している。単体の有形文化財から土地建物一体としての不動産の構成要素になったともいえる。

三―3 明治の盗難・修理・調査

明治四年から十二年までの流浪の時期、鯢は水谷論文（註1）によれば二度にわたり鱗を盗まれた。まず明治九年七月二十九日、山下門内博物館で陳列中の北鯢の鱗三枚を、東京府士族の一人がはざとり、鑄つぶして計七十五匁（二十八g）の指輪などにして売却し、逮捕された。また名古屋到着後天守に揚げられたのちの明治十一年十二月十八日、名古屋鎮台の兵が足場を登り頭部の金をはぎ売却しようとして逮捕された。

明治十一年の盗難については、名古屋城所蔵資料から、修理の事実が確認できる。すなわち、先にふれた昭和十二年（一九三七）の北鯢鱗金板盗難事件に際し名古屋城が作成した金板盗難部分の拓本六十枚余の中に、「裏 明治十一年十二月銘」と鉛筆で記す一葉が含まれており、金

板が剥がされた銅板を金板接着のため鯢本体からはずしたところ、裏側に明治十一年十二月の銘が刻されていたと解釈できる。明治十一年十二月という記載から、明治十一年十二月十八日の盗難後、ただちに修理したことになる。本件は名古屋鎮台車卒による不祥事であり、修理は鎮台の責務として内々に行われたのであろう。

なお鎮台は、鯢復後も鯢の調査と保全を行った。宮内庁宮内公文書館蔵「名古屋城金鷲尾損所調査図」一卷（図5）は、明治十三年、名古屋鎮台が両鯢の損傷を調査し作図した図巻であり、明治二十六年の名古屋城本丸の御料地への編入にともない陸軍省から宮内省に保管転換されたと考えられる。金の剥落箇所や修理跡が丁寧に図示されており、南鯢の金欠落部のいくつかは、昭和十二年の盗難事件にともなう修理箇所図面と完全に一致する。鳥除けの金網を再度設置すること、飛散した鱗片を鎮台が保管していることも記しており、復旧された金鯢は再び鳥の餌食になったらしい。

本件からもうかがえるように名古屋城の維持費は莫大で、明治二十四年（一八九一）の濃尾震災による被害を陸軍経費で修理したのちの明治二十六年、天守や本丸御殿を含む本丸が名古屋離宮となり宮内省の管理下におかれた。宮内省は当初本丸の現状維持に努めたが、のち方針を転換し、明治四十三年には旧江戸城の櫓や門に掲げられていた銅鯢七組十四点を名古屋離宮に運び込み、小天守や西北隅櫓などの屋根上にあつた旧来の瓦鯢全点と交換した。おろされた瓦鯢は一部を除き破却されたと考えられる¹⁶。

明治末期のこの大規模な鯢変更においても天守金鯢のみは手を付けられず、創建時の姿を保った。

三―4 名古屋市下賜と盗難

名古屋城が離宮とされたのは、天皇皇后の東海道往還途中の宿泊施設という利便性のゆえであったが、交通機関の発達により宿泊の必要性は薄れ、昭和五年（一九三〇）、名古屋離宮は廃され名古屋市に下賜された。

下賜直後、天守は国宝に指定され、名古屋市は国宝建造物の悉皆調査に着手する。前に述べたとおり、昭和十二年一月、調査のための足場を利用した盗難事件により北鯨鱗五十八枚の金板が剥ぎ取られた。

しばしば誤解されるが、盗まれたのは最表面の金の薄い板であり、銅基板はそのまま残された。金板は銅の基板に漆と小鋲で接着されているだけなので、鋲を抜くなり鋏で切るなりすれば容易に剥奪できたのである。

この事件については、損傷箇所拓本や作業日誌、会議議事録（名古屋城総合事務所・名古屋市政資料館蔵）や新聞記事により、発生から修理までの経緯が知られる。詳細は省くが、犯人逮捕後、金板をつぶした金塊が市により買い戻され、購入した金も使用して金板が大阪造幣局で新作され、旧銅板に貼られた。その銅板を屋根上の鯨に打ちつける作業が数日繰り返し、従前からはがれていた南鯨金板も補われ、一件は落着いた。なお南鯨修復図面も残るが、現存する鯨と一致する修復図面はない。

この一件で注目すべきは、「鯨の金純度にはいろいろあるため、修理にあたっては金の厚みは一番厚い鯨にならない、純度も一番高い鯨にならない」という修理方針が当初は提案されたが、現存する金板の純度は市民には公表しないことになり、最終的に十四金という低純度の金で修理されたことである。余った金塊を再度固めたインゴット（一号）の純度も

金五四・一八%ときわめて低く、盗まれた金板は多様でかつ多くが低純度であったことが想像されるのである。

四 鯨写真

四―一 幕末・明治の鯨写真

このように、鯨の所有者（管理者）は、徳川家から明治新政府にかわり、名古屋鎮台（のち陸軍省）、宮内省と保管転換され、最終的に名古屋市所蔵となった。所在場所は、名古屋城から東京浅草の徳川邸、そして皇城に移った。さらに北鯨は湯島聖堂での展示を経て山下門内博物館に展示され、明治十二年名古屋城に戻った、南鯨は、ウィーン万博後各地を遊行しやはり名古屋城に戻った。

そして、幕末以降、所有者や所在場所が変わるごとに鯨は撮影あるいは絵画化・図面化されている（内訳は表3参照）。ここまで頻繁に撮影や調査がなされた城郭の構成要素はおそらく他にはなく、鯨が担うことになった近代史がここにも反映されている。とくに写真に関しては、いわゆる古写真が四十点以上存在する。よって、章を改めいったん鯨通史から離れ、幕末・明治の鯨撮影について述べておこう。

【慶勝写真二】浅草瓦町邸

最も古い金鯨の近接写真は、明治四年の鯨貢献に関わるもので、徳川林政史研究所に所蔵される徳川慶勝撮影写真の中に含まれ、ガラス原板と鶏卵写真を含め十九点を数える¹⁷⁾。その内十七点は台車上の鯨を真横から撮影する縦長写真で、北鯨は右半身（図6）、南鯨は左半身（図7）が写っている。カメラ位置はほぼ同じで、日の当たり具合が異なるよう

だ。撮影者慶勝は、明治四年四月十日に名古屋から東京浅草瓦町の邸宅に移っており、六月十七日の鯨到着は浅草邸で出迎えたと考えられる。同月二十二日に鯨は早くも皇城に搬入されたため、正味四日間で慶勝は両鯨を撮影したことになる。鯨に費やしたガラス原板の枚数が他の慶勝写真に比べ圧倒的に多く撮影方法にも倉卒感があることから、鯨への惜別を込め限られた時間の中で急ぎ撮影したものと想像できる。なお、北鯨写真の背景に長屋の屋根妻部外壁が写っており、慶勝が撮影した瓦町邸写真との比較から、船着場北側にあった長屋脇の空地に鯨は仮置きされたと考えられる。

加えて、狭い場所での急かされた撮影でありながら、鯨細部が明確にとらえられていることに瞠目したい。よって、現存する鯨との比較から、九号鯨という扇形の鯨が南鯨左半身の鯨と特定できる（挿図1）。八号、十号も九号周辺の鯨であった可能性が高い。一方、南鯨の尾鰭の先端部が一部黒く写っており、金の欠落箇所と見られる。これら損壊箇所が明治五年十月、博物館当局により修理され、四―五号として現存するのであり、現存品の特定の上でも慶勝写真は重要である。

【慶勝写真二】 ウイーン博覧会

北鯨は、湯島聖堂での博覧会（会期明治五年三月十日―四月三十日）に展示された。角度などが異なる鯨写真が今確認できるだけでも十点以上現存し、しかもその多くが博覧会関係者の記念写真である。中でも「湯島聖堂博覧会関係者写真」（東京国立博物館蔵・図9）は、博覧会開催直前の同年二月、名古屋出身の植物学者伊藤圭介翁を中央にし、田中芳男、町田久成、蜷川式胤ら当時の文化行政を代表する面々が鯨の前でポ―

ズをとる歴史的な一枚である。¹⁹ この他、博覧会関係者と思われる青年が金鯨の前に立つ写真もあり（図10参照）、湯島聖堂博覧会での金鯨公開は、若き知識人にとり、新時代の幕開けを象徴する晴れやかな戦果であった。また各写真の比較から、湯島聖堂大成殿前に安置されたあと杵や柵が順次設置され、「貢納名古屋藩」と大書する木札が置かれたことがわかる。博覧会開催後もこの「貢納名古屋藩」木札は鯨の前に置かれており、観客への説明用キャプションであったことが、博覧会の様子を描く各種錦絵（表3参照）からも知られる。

一方、同じ木札を飾るものの、北鯨ではなく南鯨を撮影し、撮影場所は湯島聖堂ではなく菰巻きされた大蘇鉄が植わる庭で、台車も布で隠されている金鯨写真が複数ある。

その内もつとも有名な写真が、ポーズする男衆二名とともに南鯨を撮影する、徳川林政史研究所に所蔵され慶勝撮影写真としてしばしば紹介される一枚（図11『徳川林政史研究所所蔵写真資料目録一』のうち三七八（貢納名古屋城天守金鯨）（二丸蘇鉄の庭）である。鶏卵紙の焼付写真をアルバムに貼った一葉も存在する（『徳川林政史研究所所蔵写真資料目録二』八一九（貢納名古屋城天守金鯨））。

ただしこの二点を慶勝が自身で鯨を撮影した写真としてよいかは検討を要する。ほぼ同じ構図の南鯨写真が、写真アルバム『奥国維府博覧会出品撮影』に見いだされるからである。²⁰ 『奥国維府博覧会出品撮影』とは、ウイーン万国博覧会（会期明治六年五月一日―十一月一日）の開催に先立ち、博覧会事務局の事業として写真家横山松三郎らが出品作品を撮影した鶏卵写真をアルバムに仕立てたもので、東京国立博物館に五帖、早稲田大学図書館に一帖が所蔵されている。その全てに蘇鉄と金鯨の写真

が含まれており、とくに東京国立博物館所蔵の一本（『埴国維府博覧会出品撮影』一・乙本）は、人物のポーズやトリミングなどがほぼ完全に一致する（図12）。さらに東京国立博物館所蔵の別本（『埴国維府博覧会出品撮影』二・甲本）には、慶勝写真と全く同じ薦巻き蘇鉄を背景にするものの人物がいない南鯢写真がある（図13）。

加えて、同じ薦巻き蘇鉄が写るものの、鯢ではなく五重塔を被写体とする写真が東京国立博物館所蔵乙本に含まれる（図14）。この五重塔は、金鯢と同じく「巨大物品」として日本からウィーン万国博覧会に出品された「東京谷中天王寺五重塔ノ雛形 高サ二間」（記載は『埴国博覧会参同記要』^②上）による）に他ならない。蘇鉄の枝ぶりから、鯢写真よりやや右側にカメラを置いたと考えられる。さらに、慶勝写真において鯢の前で座す職人頭のような男性は、『埴国維府博覧会出品撮影』の「大太鼓」の前でもポーズを決めており、大太鼓の右手にやはり蘇鉄が写りこんでいる。ここから、大太鼓、五重塔雛形、金鯢などのウィーン万国博覧会での「巨大物品」は、蘇鉄が植わる同じ庭園で、同じ時期、同じスタッフにより撮影されたと考えられる。

さらに指摘すれば、慶勝撮影のアルバム「器械・器具写真（帳）」に、鯢写真と合わせて貼り込まれた模型や器物の鶏卵写真（『徳川林政史研究所写真目録 二』八一―から八三四まで）は、『埴国維府博覧会出品撮影』に「日本各地産物」として収録されたウィーン万博出品作品の写真とほぼ一致する。

詳細はここでは触れないが、慶勝写真のうちの蘇鉄を背景とする鯢写真とは複写であり、原本は、金鯢や五重塔雛形、各地産物などのウィーン万国博覧会の出品予定作品を博覧会事務局の依頼により横山松三郎らが

博覧会に先立って撮影した膨大な写真のうちの一部と考えられる。そして原本の撮影場所は、義勝写真と同じ枝ぶりの大蘇鉄が植えられていたことが写真から確認できる、内山下町にあった旧島津藩装束屋敷の庭と推定したい（図15「山下門内博物館表門」・明治七年和田一郎撮影・東京国立博物館蔵）。

旧島津藩装束家敷での巨大物品撮影時期は、蘇鉄が防寒のため薦巻きされていることから、明治五年の晩秋から六年の春までとなり、同六年二月に南鯢はウィーンに向け出港しているため、二月以前に絞られる。

旧島津藩装束家敷は、同六年三月、ウィーン万国博覧会事務局を書籍館等と合併して作られた「山下門内博物館」となり、四月から展示が公開された。蘇鉄を背景とした鯢や五重塔雛形など「巨大物品」の写真は、山下門内博物館開館前の冬、ウィーン万国博覧会事務局によつて装束家敷に運び込まれ撮影されたものとなり、すべて辻褄が合う。なお、山下門内博物館は明治十四年まで存続し、以降上野に移転し現在の東京国立博物館となった。

「埴国維府博覧会出品撮影」諸本が掲載する写真には、被写体の配置がかわるなどの異版があり、とくに金鯢、五重塔などの「巨大物品」は異同がはなはだしい。被写体の軽重により複数の写真が撮影され、それらの紙焼きを貼り込んだアルバムも複数作成され、慶勝は、それらの内の一部（現存する早稲田大学本・東京国立博物館本とはおそらく別本を、おそらくは鯢旧所有者の縁により手にする機会を得、写真技術向上のためにも複写したと考えられる。ただし、金鯢を写すガラス原板写真は他の器物写真に比べ精細であるため、アルバムではない別の原因によったのかもしれない）。

慶勝写真に関するこれ以上の考察は本稿からあまりにも逸脱するため行わないが、金鯰撮影を軸として明治初期の博覧会及び博物館行政を語ることにすら可能であろう。ともかくも、明治四年から六年にかけての大変革の過程で鯰は、当時の日本における最新技術による撮影の被写体となったのである。

南鯰は、旧島津藩装束家敷での撮影後の明治六年早々、ウィーンに向けて出港した。ウィーンの博覧会会場で撮影された写真が二枚あり（図16 東京国立博物館蔵）、南鯰が会場中央に飾られていたことが知られる。日本に残された北鯰は、明治六年四月以降、山下門内博物館で常設展示され、その写真もある（図17 東京国立博物館蔵）。

四―2 名古屋市下賜後のガラス乾板写真と実測図

ウィーン万国博覧会後の明治十二年、先に述べたとおり鯰は名古屋城に戻され再び天守上にのぼる。その頃天守を撮影した写真には当然鯰も写されており、名古屋鎮台により鳥除けの網をかぶせられた姿が写っている。

昭和五年（一九三〇）の名古屋離宮の名古屋市への下賜と国宝指定にともない、名古屋市は国宝調査の一環として鯰のガラス乾板写真撮影と実測を行う。昭和二十年の空襲で鯰が炎上した後、ガラス乾板と実測図は、焼失を免れた本丸御殿障壁画とともに灰宝神社に疎開され、終戦後名古屋城に戻された。現在、南北鯰の近接写真四枚と詳細な図面二面（図18・19）が現存する。近接写真は東側から撮影したもので、徳川林政史研究所の慶勝写真とは逆であるため相互に補完する関係にある。ただし

実測図は、鱗の詳細まで描く訳ではなく、正確さには欠ける。

戦後、昭和三十四年に鉄筋鉄骨コンクリート製天守が再建される。金鯰も復元されたが、火災の難を避けるため、芯（原型）は木ではなく青銅の铸件とされた。鱗は、1mm厚さの銅板に銀メッキし、表に厚さ〇・一五mmの十八金の金板を貼ったもので、銅製の鋳で青銅原型にとめ、釘頭を十八金の金板でくるむという仕様であった。大阪造幣局に示された仕様書（名古屋城総合事務所蔵）には「金板は純金呼出し加工をし、表面にはメラミン樹脂塗装を施す」とあり、十八金を純金（二十四金）に見せるための「純金呼出し加工」がなされたことがわかる。「純金呼出し加工」については追って検討したいが、十八金（金七十五%銀二十五%）という低品位の金をより金らしく見せるための加工がなされたと考えられる。

五 戦後の鱗

昭和三十四年の天守再建時、二十一年にアメリカ軍により接收された鱗破片は、まだ返還されておらず、昭和四十一年（一九六六）、ようやく金塊が名古屋市に手渡された。この金塊を用い、同四十三年名古屋市旗の鯰型冠頭（二十四金鍍金）が作られ、昭和四十四年には純金製の茶釜が作られた。ただし、それらが金鯰鱗の残滓を用いた証拠は実はない。名古屋城総合事務所他蔵「金鯰残塊返還関係書類」一綴に、接收と返還の経緯が簡潔明瞭に記されており、以下原文を引用する。

昭和20・5・14 名古屋城焼失。当時金鯰は撤去中で雄（北側）は火災のため溶解。雌（南側）は天守閣下まで降してあったため残骸として残った。

21・8・3 当時の占領軍第一軍団司令部行政命令により保管してあった金鯪残骸13箱（石炭箱）を貴金属として接收される。

34・10・26 「接收貴金属等の処理に関する法律」第5条により大蔵題字あて返還請求を行う。

38・1・14 種類 形状 重量 品位 所有等について大蔵大臣より認定の通知をうける。

41・3・14 大蔵大臣より返還決定通知をうける。

41・3・29 返還物の内容その他について大蔵省へ照会。

41・5・14 上記の回答を受領（回答は別記）

42・3・14 造幣局東京支局で受領（原文一部省略）

すなわち昭和二十一年に石炭箱十三箱という大量の金属残骸が接收された。昭和三十四年紆余曲折の末成立した「接收貴金属等の処理に関する法律」に基づき、名古屋市は直ちに返還を請求し、昭和四十一年返還が決定された。要返還量と返還される地金量の間に差があったため同年三月照会したところ、下記の回答を得た（以下原文のまま）。

「要返還量と返還地金との相違について

現在、国が保管している合金の地金のうちには、貴書に認定されたものと同一品位及び同一重量のものがありませんので、このような場合には認定されたものの評価額に相応する他の合金を引き渡すこととしております」（傍点筆者）

結果として名古屋市は、金塊（総量六四四七g、内金三七二八・四g、銀一〇三四・七g、金五七・八三%銀一六・〇五%）と、地金（総量量二一七・二g、内金一二五・六g銀三四・5g）という低品位の合金を受領し、その評価額は約二百二十万円にすぎなかった。ちなみに昭和

三十四年に復元していた金鯪は、八十六kgの金を新規購入し用いており、金価格は二尾で四千八百万円に及ぶ。

このように、大蔵省を通じ返還された金塊は、鯪の残滓ではなく「他の」合金で、量もごくわずかであった。ただ鱗が接收されていなければ金の返還もなく、返還された金塊から市旗冠頭と茶釜が作られたことは確かであり、その意味において金鯪は再生したことになる。

六 結語 金鯪は、何のために作られたのか

以上、鯪の誕生から戦後までを概観した。狭義では、市旗冠頭や茶釜に江戸期の金鯪の金が使われていないのは明らかである。よって江戸期の鱗の現存する遺品は、名古屋城に所蔵される①②（表1）と、③の出土資料のみとなる。

修理記録等の考察から、出土品や離れた場所からの収集品は北鯪鱗の可能性があるが、それ以外の伝世資料は南鯪鱗と見てよい。四―五号は明治五年以降の補作と確定でき、四―五号に類似する鱗片も同時期の作の可能性があるが、それ以外は江戸期の鱗と確定できる。それらが慶長の創建時に制作されたものか、あるいは享保・文政・弘化・嘉永の修理の補作かは決めがたいが、構造や外観から新旧があることは明らかで、五号と七号は相対的に古く、六号・八―十一号は、文政期の補作の可能性が高い。

なお「特殊財産台帳」に記載されず鱗でもないため今回の考察から外したが、金鯪の残骸と思われる金属塊が複数名古屋城に伝来する。収集過程を示す記録類はないものの、昭和二十年末、天守や本丸御殿の焼損金具類とともに焦土から収集されたものと考えられ、真木をくるんでい

た鉛板の残骸の可能性が高い。この金属塊に似た外見の小塊が「鯨の黒焼き」の名で、横山隆一まんが記念館に保管されている。昭和二十年に名古屋城内で採取され、昭和三十六年珍コレクション蒐集家としても知られた漫画家横山氏に鯨の焼け残りとして贈呈されたものである⁽²²⁾。

これらを含めても、名古屋城の金鯨の残滓はわずかしがなく、とくに金色を呈する鱗の遺品は、今名古屋城にある①②③の一部しかない。よってこれら遺品が希少であることは明らかであるが、修理記録から制作者を考える手掛かりが得られることで、さらに資料的価値を増す。

ここで、金鯨を修理した六左衛門の話に戻る。

二回にわたる享保時の修理では、いずれも「鋳屋 六左衛門」の名が修理記録にあがっていた。「飾屋」やそれに類する職種は、木工事や左官仕事、土瓦仕直しが主体であった他の年の修理記録には記載自体なく、鯨と天守五層金物が修理された享保十一年と十五年にのみあり、そして職人の名は二度とも「六左衛門」であった。ここから、享保修理において、鋳屋六左衛門が金物修理とともに金鯨修理を請け負った可能性が浮上する。

一方、宝暦の天守大修理においても「鋳師屋 六左衛門」の名が、動員された職人衆の最末尾に記されている。宝暦修理では、金鯨修理はなく、初層から四層までの瓦屋根を銅に葺き替え、既存の破風や六葉を補填する大規模な金具工事が行なわれた。よって瓦当を含めれば千を超える数の金具が新調され、既存の金具の修理も多数にのぼった。その工程は、彫刻の他、煮洗、水銀鍍金、煮黒目、漆箔押など多義にわたっており、六左衛門は多数の職人を束ねる立場にあったと考えられる⁽²⁴⁾。

宝暦の修理を享保と同じ「六左衛門」が行ったのか、あるいは次世代

の「六左衛門」が行ったのかはわからない。いずれにせよ、享保の修理と宝暦の修理が、同じ名の親方のもとに行われていた。

ここからさらに、創建期の名古屋城金鯨や江戸城の金鯨も、彼ら鋳師の仕事であった可能性が浮上する。

とするなら、なぜ彼らは、自家葉籠中の在来工法―例えば水銀鍍金や漆箔―を用いず、金板を銅基板に貼るというあまり例のない工法を用いたのであろうか。

ここからは想像の域を出ないが、筆者は、金の光輝と堅牢さがあわせて求められたことが理由の一つと考える。

そもそも、金色の鯨瓦は安土城をはじめ多くの中世城郭から出土しているが、金属製の金鯨は江戸城、徳川期大坂城など幕府直轄の限られた城にしか置かれなかった。天守の屋根に金の鯨を置くことは、城の最上部を金色の光輝で飾ることに他ならず、よって、鯨はより高く大きく、金色はより強くまた永く輝くことが求められよう。土より金属の方が大きく作れ、また表面が平滑である方が強い光を安定して放つはずで、製作費や維持費を度外視すれば、金属製の鯨が優位に立つ。その場合、水銀鍍金や漆箔より金板を用いた方が、「金らしい」仕上がり長く保ち続けるはずである。「金らしい」仕上がりとは、銀の青白さや銅の赤味からは中庸で、なおかつある程度の固さを保持し、酸化せず、当初の輝きを放ち続けるという意味である。まして屋外においては、鍍金や漆箔の劣化が早いことは言を俟たない。すなわち、名古屋城、そして江戸城の金鯨では、金を金らしく末永く見せるため、金板貼り付けという工法が選択されたと考えたい⁽²⁵⁾。

最後に、金鯨の鱗は、名古屋城に今あるものしか現存しない。翻って、

安土城などの金鯨瓦においても、金の発色と輝き、堅牢性が模索されていたはずである。すなわち、信長以来の天下の覇者たちの天守にかける夢を具現する現存唯一の資料が、本稿で考察した鱗なのである。名古屋城金鯨は、名古屋城のシンボルにとどまらず、近世城郭史に輝く象徴であり、その輝きを今にとどめる唯一の遺品が貴重であることは言をまたない。

本稿作成にあたり、名古屋市工業研究所、名古屋市博物館、名古屋市蓬左文庫、名古屋城調査研究センターの皆様にも、多くのご教示を賜りました。

三宅康博氏、反保元伸氏、杵名貴彦氏には、本稿作成の契機を与えていただき、視野を広げていただきました。

三木稔氏には貴重な御助言を賜りました。

最後に、筆者には無縁であった鋳金具の世界への入口を示してくださった久保智康氏に、感謝をささげます。

註

(1) 名古屋城金鯨についての主要参考文献として下記がある。

名古屋市編『名古屋城史』名古屋市役所発行 一九五九年

服部鉦太郎『名古屋城叢書 8 』『巷説 名古屋城綺伝』名古屋城振興協会発行 一九七二年

水谷盛光『金鯨盗難事件の真相考察』『郷土文化』第四〇巻第二号 一九八五年

『金鯨 やつぱりシヤチだわ』株式会社NTT制作・発行 一九九二年

井上章一『名古屋と金シヤチ』NTT出版 二〇〇五年

中日新聞社編『名古屋城金シヤチ特別展観 公式ガイドブック』場金シヤチ特別展観実

行委員会発行 二〇二一年

井上・二〇〇五年は、多くの文献と現地調査を駆使しており、示唆に富む。

(2) 朝日新聞東京版昭和二十六年六月十六日朝刊に、同月十四日名古屋城銅鯨尾鯨などを盗んだとして容疑者が逮捕された記事があり、鱗が東南隅櫓、銅瓦が西南隅櫓に保管されていたことが知られる。それら鱗破片と銅瓦は今なお名古屋城に保存されている。なお銅鯨には「文政十年大修復 昭和二十年灰燼に帰す」との貼札があると記事にある。文政十年の文字は現在確認できず、本記事は貴重。

(3) 刻銘の解説には、麓和善氏の御教示を賜った。また比佐陽一郎氏、杵名貴彦氏に撮影していただいた。

(4) 三木稔氏のご教示による。

(5) 『編年大略』享保十一年「一 此年 尾城御天守鯨御修復有之惣長壹丈三尺五寸但頭長五尺八寸巾二尺八寸高三尺五寸眼台さ一尺三寸惣身は銀也黒目は赤銅惣鉢下地櫓に而作り上を鉛に而包其上を唐金に而包又均に而苔を附る也」

(6) 本拓本の調査・撮影については、城野誠治氏・清水每子氏のお手を煩わせた。

(7) 全文は下記のとおり。翻刻は『名古屋叢書』による。傍線は本稿筆者。

編年の記に曰、享保十一年丙午、当年、尾城御天守魚虎 御修復、櫓の木にて作り、上を鉛にて包、其上を唐銅にて包、又其上を金の苔を付る。或記に曰、先年シヤチホコのことを聞に、金下の木には清正の名まえ彫て有し由、是を掛りの輩、分取にせしは残念なり、何分にも開闢の木品に付、御矢倉などへ納置度ことなりし。或記に曰、シブン付黄金千九百四十枚、小判にして一万七千九百七十五両。聞書に云、御天守、蔭の頭上には、以前、黄金不三張詰に有之所あり、文政御修復之度に、其金不足之処も、不殘金を張り候様可致哉と、御作事奉行被伺候処、御老衆評議有て、先々已前仕来之通たるべしと被定候由。

黄金の事、享保御修復の時、金薄く打たる故、大にあしく、文政には又それよりも薄

く打たる故、十年ばかり過て、早、めくれるやうに成、其上、銀を大分交せて打ければ、性あしく成。

- (8) 令和七年三月の時点で、巻二から巻十四まで、すなわち天保六年までが、名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書』第四編―1・2・3として翻刻出版されている。

- (9) 朝日「永遠なれ 名古屋城本丸御殿」『失なわれた国宝 名古屋城本丸御殿』二〇〇八年
(10) 水谷一九八五年も「鯉貢献」を引いているが、原本ではなく近代の抄出本である。また明治の盗難については水谷論文に詳しい。

- (11) 「名古屋城天守金鷲尾献納」JACAR (アジア歴史資料センター) RefA15071333800 太政類典・第一編・慶応三年～明治四年・第百八十四巻・理財・雑三(国立公文書館)
「三年十二月十二日名古屋藩伺弁官宛名古屋城天守ノ金鷲尾方令ノ際全無用ノ長物ニ候間右金ヲ剥シ乍聊御用途ノ未ニ貢納仕度且城内建物逐次取毀将来修繕ノ元費ヲ省キ公廩ノ欠乏ヲ補ヒ一挙兩利ノ処置仕度此段御指揮奉伺候以上三年十二月十日誌伺之通三年十二月十二日太蔵省へ通達弁官別紙名古屋藩金鷲尾献納伺済書類御廻シ申入候也四年正月十日藩東京府へ達弁官明後二十二日名古屋藩ヨリ金鷲尾差出候間浅草御門へ為心得通達致候様可被取計候也四年六月十二日」(翻刻はアジア歴史資料センターホームページによる)
(12) 『名古屋城史』では大分と愛媛の博覧会にも出品されたとするが、典拠が知られない。松山城では明治十一年四月十日から五月二十九日まで、松山城で物産博覧会が開催されており、これに出品されたのかもしれない

- (13) 「金鷲尾復旧の伺」JACAR (アジア歴史資料センター) RefC04028126500 明治11年「大日記6 鎮台7月末乾陸軍省第1局」(防衛省防衛研究所)
(14) 「9月4日 宮内卿代理 金鷲名古屋城へ復旧の儀申立の件開届に付申入」JACAR (アジア歴史資料センター) RefC09120492800 明治11年9月 10月 諸省 7 (防衛省防衛研究所)・「2月12日 金鷲尾復旧落成に付受取方の義伺の通指令案」JACAR (アジア歴史資料センター) RefC10072268200 明治12年自1月至2月 製図日記 第4局 第

2課(防衛省防衛研究所)

- (15) 名古屋市政資料館データ公開「伊藤次郎左衛門家資料」二四四五―二四「名古屋城金鷲尾撃揚ノ議願」。十三代次郎左衛門祐昌(一八四八―一九三〇)の筆と考えられる。

- (16) 名古屋城所蔵の江戸城銅鯉も、銘は基本的に頭部に記されている。朝日「江戸城、そして名古屋城の銅鯉」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第三号・令和四年)

- (17) 徳川慶勝撮影写真については、主として下記を参照した。

岩下哲典「徳川慶勝の写真研究と撮影写真(上)(下) 徳川林政史研究所『研究紀要』第二五・二六号 一九九一・九二年

「徳川林政史研究所所蔵写真資料目録」一―七 徳川林政史研究所『研究紀要』第二六号・第三二号 一九九二年・九八年

白根孝胤「幕末・維新时期における尾張家の撮影写真と技術開発」徳川林政史研究所『研究紀要』第四〇号 二〇〇六年

白根孝胤「明治初年における徳川慶勝の動向と撮影写真」徳川林政史研究所『研究紀要』第四五号 二〇一一年

原史彦執筆「徳川慶勝―知られざる写真家大名の生涯」徳川美術館編集・発行 二〇一三年

徳川義崇監修 徳川林政史研究所編『写真集 尾張徳川家の幕末維新 徳川林政史研究所所蔵写真』吉川弘文館 二〇一四年

- (18) 明治四年の慶勝日記の存在は知られず、この間の動向は、前掲の白根「明治初年における徳川慶勝の動向と撮影写真」によった。

- (19) 写真裏に下記が記載される。「明治五年二月聖堂ニ於テ博覧会ノ節ノ職員ノ写真三葉ノ内、織田信徳、廣瀬直水、久保弘道、谷森眞男、小野職懋、服部雪斎、田中芳男、内田正雄、伊藤圭介、町田久成、蜷川式胤、田中房種」。

- (20) 慶勝写真については、藤田英昭氏のご教示を賜った。

- (21) 『埃国博覧会参同記要』は、田中芳男他編、明治三十年発行。博覧会の最終報告書。
- (22) 田所菜穂子「横山隆一記念まんが館の死蔵資料解消に向けた取組」『博物館研究』第
六五八号 二〇一三年
資料詳細について、田所菜穂子氏のご教示を得た。
- (23) 徳川林政史研究所蔵「国秘録 御天守御修復留 中」
御道具方支配
御鋳師
六左衛門
以上
- (24) 名古屋城西之丸の御蔵構には「銅方職人」の作業小屋が建てられた（名古屋城総合事務
所蔵「御天守御修復取掛りより惣出来迄仕様之大法」・『一、御蔵構南之方、御蔵々附下
銅方職人小屋取建』）
宝暦の天守修理では各層の鬼瓦も唐金（青銅）製の鋳物に交換された。名古屋城に現
存する焼損鬼板の複数に『濃州厚見郡岐阜住 御鋳物師岡本河内大掾藤原正信作』の刻
銘があり、岐阜在住の鋳物師岡本河内大掾藤原正信が携わったことが知られる。「銅方職
人」の小屋は岡本ら鋳物師が使った可能性が高いものの、鋳師六左衛門らも使用したか
もしれない。なお、宝暦修理記録に岡本正信の名は登場しない。
- (25) 金板を添付した場合金を取り出すのも容易であり、鯨を金蔵とするという従来の見方も
あながち誤りではない。

《Title》

The “*Kin-shachi*”; a pair of golden tiger-fish ornaments on the rooftop of the main keep
in Nagoya Castle, from the past up until now

《Keyword》

Nagoya Castle, main castle keep, “*Kin-shachi*”; golden tiger-fish roof ornaments,
Yushima Seidō, 1873 Vienna World's Fair

表 1 名古屋城所蔵 金鯨・冠頭・茶釜 一覧

	金鯨初代		金鯨二代(現在)		接收・返還金		
	北鯨(雄)	南鯨(雌)	北鯨(雄)	南鯨(雌)		鯨型市旗冠頭	丸八文様鯨環付真形釜
制作年	慶長17年(1612)		昭和34年(1959)		昭和42年(1967)返還	昭和43年(1968)	昭和44年(1969)9月26日
制作者	徳川家康の命		原型 大谷相模掾鑄造所 金板制作・貼付 大阪造幣局			大阪造幣局	大阪造幣局 原型 伊藤鑑一 監修森川勘一郎
現所在場所	昭和20年全焼	昭和20年焼失 鱗一部現存	再建天守閣			名古屋城西の丸御蔵城宝館	名古屋城西の丸御蔵城宝館
大きさ	高1丈1尺5寸(尾藩世記)=379.5cm		高262.1cm	高257.9cm		高16.2cm 縦12.0cm 幅8.0cm 総高20.0cm 200分の1 平成元年名古屋城に保管転換	高22.3cm 直径25.2cm 口径12.3cm 天守再建10周年・市制80周年記念。鯨型環付、ねじ環、明珍写し。本体に丸八文字。蓋一文字面取。
	高7尺7寸5分 (文政10年仕口図)	高8尺1寸5分 (文政10年仕口図)					
	高8尺5寸5分 (昭和実測図)	高8尺4寸6分 (昭和実測図)					
総重量	梱包含め300貫目(1200kg・鯨貢献)		1,272kg	1,215kg	6,664.4g	1245.23g	4159.87g
金重量	77貫301目余(288.86kg・尾藩世記等)		446900g(44.69kg)	433900g(43.39kg)	金3,854.0g 銀1,069.4g その他	金24.7g	金3814.6g 銀345.27g
制作方法	芯木(寄木造。当初はサワラ。文政10年ヒノキに取替え)を鉛で包み、漆を塗り、鱗を貼る。鱗は、銅板で裏打ちした金板(厚さ1.5mmとされる)。釘は銅。		芯(青銅の鑄物)に、鱗を貼る。鱗は銅板(厚1mm)の表裏に銀メッキし、金板(厚0.15mm)を貼る。表面はメラミン樹脂加工(修理時洗浄)。			青銅の地に金鍍金	純金
金の品質	不明「金1,940枚、小判にして17,975両」(金城温古録)		18金(75%) 2尾で89kg		金57.83% 銀16.05%	24金(100%)で鍍金	22金(91.6%)
鱗枚数など	鱗194枚 (文政10年仕口図)	鱗236枚 (文政10年仕口図)	鱗112枚 ボルト2尾で1500本	鱗126枚	金塊1・地金1		
制作費	令和7年現在の金相場なら数十億		2尾で4,800万円			170,120円	3,302,031円
主な修理	享保15年(1730)・文政10年(1827)・明治11年(1878)・昭和12年	享保11年(1726)・文政10年	昭和59年(1984)・令和3年(2021)				
修理者	享保15年 六左衛門	享保11年 六左衛門	昭和59年 名古屋市工業研究所 令和3年 京都社寺鋳漆株式会社				

表 2 名古屋城所蔵 金鯨鱗一覧

号	分類	概要	形態	点数	外装封筒 記載事項	『特殊財産台帳』記載事項		
					複数の外装があるものは、古い方の記載のみ収録。	概要	受入年月日 (原表記漢数字)	重量 .75g=1匁
1号	①	北鯨 盗難関係	インゴット 刻印「5418 4575 347.5g」	1	「貴重品」[昭和拾貳年金鯨修理残材金 九拾匁 分析済 名古屋城管理事務 所]【名古屋市茶封筒】	金鯨修理残材	昭和12年3月	九〇匁
2号	①	北鯨 盗難関係	破片 二重に試験管入り 未開封	数点	「硝子管入金片 ○、二二五六瓦 金鯨 事件当時分析ノ際返品 貳号」【旧 名古屋市役所封筒】「二月六日 三 堀■生試験所長 野間公園課長殿 先 般分析ニ供シタル検体第七号第廿三号 …返納仕候」(名古屋市赤罫紙)	盗難後の分析返却分	昭和12年	○. 二二五六g
3号	①	南鯨 鰭条部 被災痕なし	棒状 下半分のみ金 板あり 表に透明被膜 あり 裏に刻線あり	1	南方鯨引下げの際脱落したもの 三号 【名古屋市役所茶封筒】	昭和20年の南方鯨引 下し時、脱落収集	昭和20年7月	銅版共三〇匁
4-1号	①	南鯨 被災痕なし	半月形	1	昭和二十年八月鯨引下げ中脱落したも の 鱗六個 貳拾八匁(南方鯨の分) 四号 【名古屋市役所茶封筒】	昭和20年、脱落収集	昭和20年7月	銅版共二八匁
4-2号	①	南鯨 被災痕なし	台形	1		昭和20年、脱落収集		
4-3号	①	南鯨 被災痕なし	L形	1		昭和20年、脱落収集		
4-4号	①	南鯨 被災痕なし	魚鱗形	1		昭和20年脱落 26年 収集		
4-5号	①	南鯨 被災痕なし 尾鰭	長方形 裏刻銘(上欠)	1		昭和20年、脱落収集		
4-6号	①	南鯨 被災痕なし 鰭先	切先形	1		昭和20年、脱落収集		
5号	②	南鯨 蛇腹 被災	特大 長方形 折り返 し部大	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共一二〇 匁
6号	②	南鯨 蛇腹 被災	特大 長方形 裏刻銘「一九」	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共一一〇 匁
7号	②	南鯨 蛇腹 被災 補修 板付き	特大 長方形 折り返 し部大	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共一一七 匁
8号	②	南鯨 被災	変形魚鱗形 裏刻銘「五十七」	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共六五匁
9号	②	南鯨 被災	魚鱗形	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共四五匁
10号	②	南鯨 被災	変形魚鱗形 刻銘「三十五」	1	封筒なし	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共四〇匁
11号	②	南鯨 被災	変形魚鱗形 刻銘あり「三十四」か	1	南方鯨 重量拾四匁 十一号 【名古屋市役所茶封筒】	亜米利加軍ニ接收ノ 際隠匿シ置キシモノ	昭和21年6月	銅版共一四匁
12号	②	南鯨 被災痕なし 鰭先 凹部	変形四角形 昭和20 年取り下し時落下した ものか	1	封筒なし	天守閣東松林内ニテ 土中ヨリ発見ノモノ	昭和27年9月	銅版共一五匁 五分
13号	①	被災痕なし	金板のみ 表裏の色 異なる	1	昭和二十九年三月十一日 旧上洛殿前 庭土中ヨリ発見 鱗片 重量壹分 拾参 号【旧名古屋市役所茶封筒】	上洛殿前庭土中ヨリ 発見	昭和29年3月31日	鱗片壹分
14号	②	南鯨か 被災	金板のみ 多数	多数	昭和二十九年四月二日 天守閣入口中 石垣上ニテ発見 鱗片 重量貳匁五分 【旧名古屋市役所茶封筒】	天守閣入口東石垣上 ニテ発見	昭和29年4月2日	鱗片貳匁五分
15号	①	被災痕なし	金板のみ 表裏の色 異なる	1	昭和二十九年六月十九日 不明門ニテ 発見 鱗片 重量貳分 【旧名古屋市役所茶封筒】	不明門ニテ発見	昭和29年6月19日	鱗片貳分
16号	②	南鯨か 被災 鰭の鰭 条	銅板のみ	1 破片 あり	昭和二十九年十二月十一日 天守閣内 ニテ発見 鱗片 重量十二匁 【旧名古屋市役所茶封筒】	天守閣内ニテ発見	昭和29年12月11日	鱗片銅版共十 二匁
17号	②	南鯨か 被災	魚鱗形 金板と銅板計 3片に分離	1	昭和三十年四月九日 旧天守閣東通路 にて発見のもの(目方銅板共拾五匁 【名古屋市役所茶封筒】	天守閣東南通路土中 ヨリ発見	昭和30年4月9日	鱗1枚銅版共 十五匁
18号	①	北鯨 盗難関係 押収 品	フエキ糊ガラス瓶入り 挟跡のある小片・紙	多数		昭和十二年金鯨盗難 事件の難品	昭和12年3月	硝子容器共五 十匁
19号	①	北鯨 盗難関係 分析 品	金板3・金粒1	破片3・ 球1	拾九号 昭和二十八年七月 名古屋工 業研究所ニテ分析品 2. 635g 【名古屋城管理事務所茶封筒】	第一回分析品 名古 屋工業研究所ニテ	昭和28年7月	
20号	①	被災痕なし	金板1	1	貳拾号 昭和三十年九月二十五日 天 守閣西北道路上ニテ発見ノモノ 【名古屋城管理事務所茶封筒】	天守閣西北道路上ニ テ発見 鱗片	昭和30年9月25日	
21号	②	南鯨 被災痕あり	金板2	4	第貳拾壹号名古屋城金鯨細片 【名古屋城管理事務所茶封筒】	鱗片	昭和32年12月11日	
番外		封印のあとあり	金庫	1				

表 3 名古屋城金鯨関係史料・写真等一覧

	種別	資料名	南北 の別	成立年代	作者・撮影者等	材質等	員数	所蔵
1	史料	図秘録 御天守御修復 上・中・下		江戸時代後期	奥村得義編		一冊	徳川林政史研究所
2	史料	御天守二有之候看板之写		江戸時代中期成立か 明治写	宮内省内匠寮写		一冊	名古屋城総合事務所
3	史料	御天守御修復取掛りより惣出来迄仕様 之大法		江戸時代中期成立か 明治写	宮内省内匠寮写		一冊	名古屋城総合事務所
4	図	御天守鯨木地仕口寸尺之図		文政10年(1827)	尾張藩作事方	淡彩	一冊	名古屋城総合事務所
5	図	御天守魚肅木地仕口寸尺之図面		文政10年 明治23年7 月写	内匠寮写(関重威)	淡彩	一冊	宮内庁宮内公文書館
6	図	文政十年丁亥閏六月御天守鯨木地仕口 寸尺之図		文政10年 明治写	宮内省主殿寮写	淡彩	一冊	名古屋城総合事務所
7	図	文政十年丁亥閏六月御天守鯨木地仕口寸 尺之図 (『金城温古録』御天守編に収録)		文政10年 江戸時代 後期 写	奥村得義写		一冊	名古屋市蓬左文庫
8	史料	尾州御留守日記 文政十年		文政10年(1827)			一冊	徳川林政史研究所
9	史料	名古屋城金鷄尾損所調査図		明治13年(1880)7月	名古屋鎮台	淡彩	一卷	宮内庁宮内公文書館
10	史料	鯨貢献(「明治四年 雑記録」)のうち		明治4年(1871)			一冊	名古屋市蓬左文庫
11	史料	金鯨盗難一件書類・拓本	主に 北鯨	昭和12～13年(1937 ～38)	名古屋城管理事務所		一括	名古屋城総合事務所
12	史料	特殊財産台帳		昭和後期	名古屋城管理事務所		一冊	名古屋城総合事務所
13	刷物	元昌平坂聖堂ニ於テ 博覧会図	北鯨	明治5年(1872)	昇斎一景画	多色刷	三枚続	名古屋城振興協会
14	刷物	博覧会諸人群集之図	北鯨	明治5年(1872)	昇斎一景画	多色刷	三枚続	名古屋城振興協会
15	刷物	古今珍物集覧 元昌平坂聖堂ニ於テ	北鯨	明治5年(1872)	二代歌川国輝画	多色刷	三枚続	名古屋城振興協会
16	刷物	東京名所三十六戯撰 元昌平坂博覧会	北鯨	明治5年(1872)	昇斎一景画	多色刷	一枚	名古屋城振興協会
	刷物	東京名勝図会 博覧会	北鯨	明治5年(1872)	三代歌川広重画	多色刷	一枚	名古屋城振興協会
17	刷物	明治七年名古屋博覧会物品録	南鯨	明治7年(1874)	博覧会事務局発行 永楽屋正兵衛他発売			国立科学博物館・東京都 立中央図書館加賀文庫
18	刷物	明治七年金沢博覧会品目	南鯨	明治7年(1874)				尼ヶ崎市立博物館
19	刷物	石川県金沢博覧場列品之図	南鯨	明治7年(1874)	華亭画	多色刷	三枚続	佐賀県立博物館・
20	刷物	御物金鯨之図 明治八年京都大博覧会 出品	南鯨	明治7年(1874)		多色刷	三枚続	名古屋城振興協会
21	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
22	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
23	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
24	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
25	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
26	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
27	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
28	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
29	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
30	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
31	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
32	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
33	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
34	写真	〔名古屋城金鯨〕	北鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
35	写真	〔名古屋城金鯨〕	南鯨	明治5年(1872)6月	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
36	写真	〔台車に載せられた名古屋城天守金鯨〕 アル バム〔新古御道具・器具・金鯨写真帖〕のうち	南鯨	明治5年(1872)	徳川慶勝撮影	鶏卵紙	一枚	徳川林政史研究所

37	写真	〔台車に載せられた名古屋城天守金鯱〕	北鯱	明治5年(1872)	徳川慶勝撮影	鶏卵紙	一枚	徳川林政史研究所
38	写真	〔貢納名古屋城天守金鯱〕	南鯱	明治5年～6年(1872～73)以降	徳川慶勝撮影	ガラス原板	一枚	徳川林政史研究所
39	写真	〔貢納名古屋城天守金鯱〕 アルバム「器械・器具写真帳」のうち	南鯱	明治5年～6年(1872～73)以降	徳川慶勝撮影	鶏卵紙	一枚	徳川林政史研究所
40	写真	明治四年展覧会写真帖のうち 名古屋城金鯱	北鯱	明治5年(1872)			一枚	東京国立博物館
41	写真	明治四年展覧会写真帖のうち 名古屋城金鯱	北鯱	明治5年(1872)			一枚	東京国立博物館
42	写真	文部省博物館主催博覧会湯島聖堂会場金の鯱と陳列	北鯱	明治5年(1872)	横山松三郎撮影	ガラス原板	一枚	東京都江戸東京博物館
43	写真	文部省博物館主催博覧会湯島聖堂会場金の鯱と男性	北鯱	明治5年(1872)	横山松三郎撮影	ガラス原板	一枚	東京都江戸東京博物館
44	写真	文部省博物館主催博覧会湯島聖堂会場金の鯱を囲む人々	北鯱	明治5年(1872)	横山松三郎撮影	ガラス原板	一枚	東京都江戸東京博物館
45	写真	〔湯島聖堂博覧会関係者記念写真〕	北鯱	明治5年(1872)2月	横山松三郎撮影	鶏卵紙	一枚	東京国立博物館
46	写真	〔湯島聖堂博覧会関係者記念写真〕	北鯱	明治5年(1872)		紙焼写真	一枚	『巷説 名古屋城綺伝』101図
47	写真	〔湯島聖堂大成殿正面と鯱〕	北鯱	明治5年(1872)			一枚	東京国立博物館 HP
48	写真	〔湯島聖堂と鯱〕	北鯱	明治5年(1872)		紙焼写真	一枚	『巷説 名古屋城綺伝』102図
49	写真	名古屋城 金鯱	北鯱	明治5年(1872)	横山松三郎撮影	ガラス原板	一枚	東京都江戸東京博物館
50	写真	名古屋城の金鯱	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	内田九一撮影	鶏卵紙	一枚	東京都写真美術館
51	写真	金鯱	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙	一枚	東京都写真美術館
52	写真	埃国維府博覧会出品撮影1 赤小花文表紙 乙	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	東京国立博物館
53	写真	埃国維府博覧会出品撮影2 流水文表紙 甲	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	東京国立博物館
54	写真	埃国維府博覧会出品撮影3 小紋文表紙	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	東京国立博物館
55	写真	埃国維府博覧会出品撮影5 紺表紙	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	東京国立博物館
56	写真	埃国維府博覧会出品撮影4 紺表紙	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	東京国立博物館
57	写真	埃国維府博覧会出品撮影 赤小花文表紙	南鯱	明治5年～6年(1872～73)	横山松三郎撮影	鶏卵紙 アルバム	一枚	早稲田大学図書館
58	写真	ウィーン万国博覧会の日本展示会場	南鯱	1873年	J.LÖROY撮影	鶏卵紙	一枚	東京国立博物館
59	写真	ウィーン万国博覧会の日本展示会場	南鯱	1873年	J.LÖROY撮影	鶏卵紙	一枚	東京国立博物館
60	写真	(山下門内博物館の北鯱)	北鯱	明治11年(1878) 撮影		鶏卵紙	一枚	東京国立博物館
61	写真	(山下門内博物館の北鯱)	北鯱	明治11年(1878) 撮影		鶏卵紙	一枚	東京国立博物館
62	写真	調査時の金鯱(北方)(焼失)	北鯱	昭和12～13年(1937～38)	名古屋市撮影	ガラス乾板	一枚	名古屋城総合事務所
63	写真	金鯱(南方)(焼失)	南鯱	昭和12～13年(1937～38)	名古屋市撮影	ガラス乾板	一枚	名古屋城総合事務所
64	写真	金鯱(北方)(焼失)	北鯱	昭和12～13年(1937～38)	名古屋市撮影	ガラス乾板	一枚	名古屋城総合事務所
65	写真	金鯱(南方)(焼失)	南鯱	昭和12～13年(1937～38)	名古屋市撮影	ガラス乾板	一枚	名古屋城総合事務所
66	図	昭和実測図101 名古屋城天守南側鯱詳細図	南鯱	昭和後期	名古屋市	一部朱筆	一枚	名古屋城総合事務所
67	図	昭和実測図102 名古屋城天守北側鯱詳細図	北鯱	昭和後期	名古屋市	一部朱筆	一枚	名古屋城総合事務所
68	図	ウロコ金板取付工程見本作製工事図		昭和34年(1959)5月	名古屋城建設工事事務所		一枚	名古屋市

表 4 名古屋城金鯱年表

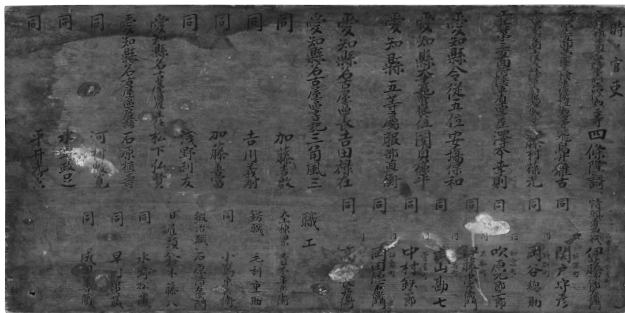
和暦	西暦	事項・出典	出典は一部のみ記載
慶長17年	1612	12月 天守完成	
享保11年	1726	8月～12月 天守・南鯱修復	「天守二有之候看板之写」
享保15年	1730	4月～12月 天守・北鯱修復	「天守二有之候看板之写」
宝暦2年	1752	3月 天守大修理着工	
宝暦5年	1755	2月 天守大修理完了	
文政9年	1826	9月 鯱修理開始	名古屋城蔵 昭和12年北鯱鱗修理拓本
文政10年	1827	2月 鯱修理完了	「御天守鯱木地仕口寸尺之図」
弘化3年	1846	正月頃 鯱修理	「青窓紀聞」
嘉永5年	1852	3月頃 鯱修理	「青窓紀聞」
明治3年	1870	12月12日 鯱献納決定	「名古屋城天守金鷄尾献納」
明治4年	1871	5月鯱引き下ろし 6月17日東京到着 6月22日皇城に貢献	「鯱貢献」
明治5年	1872	3月10日～4月30日 湯島聖堂博覧会で北鯱公開 冬 旧島津藩装束屋敷で南鯱撮影 この頃 南鯱修理	
明治6年	1873	4月15日～ 山下門内博物館で北鯱公開	東京国立博物館所蔵写真
明治6年	1873	5月1日～10月31日 ウィーン万国博覧会で南鯱公開	
明治7年	1874	5月1日～6月10日 名古屋博覧会(東本願寺名古屋別院)で南鯱公開	「博覧会物品録」 鯱の絵あり
明治7年	1874	6月16日～7月31日 金沢博覧会(兼六園)で南鯱公開	「明治七年金沢博覧会品目」 鯱の絵あり
明治8年	1875	3月1日～6月8日 第四回京都博覧会(仙洞御所)で南鯱公開	錦絵「御物 金鯱之図」・「京都大博覧会」
明治9年	1876	北鯱鱗盗難	
明治11年	1878	9月4日 鯱復旧を認める旨、宮内省陸軍大臣に申し入れ	
明治11年	1878	10月 両鯱名古屋に到着 12月 鯱鱗盗難・修理	昭和12年北鯱鱗修理拓本
明治12年	1879	2月12日 陸軍、鯱天守に復帰受入 12月 名古屋城永久保存決定	
明治13年	1880	7月 金鯱検査・金網制作	「名古屋城金鷄尾損所調査図」
明治26年	1893	6月2日 名古屋城本丸等宮内省に移管され、名古屋離宮に裁定	
明治43年	1910	金鯱以外名古屋城主要建造物の瓦鯱、皇城の銅鯱に交換。	名古屋城所在銅鯱刻銘
昭和5年	1930	12月11日 名古屋離宮廃止、名古屋市に下賜	
昭和5年	1930	12月13日 天守等国宝指定	
昭和12年	1937	1月4日 北鯱鱗盗難 3月修理	
昭和20年	1945	5月14日 天守・北鯱・本丸御殿等焼失	
昭和21年	1946	8月2日 金鯱鱗米軍に接收	
昭和34年	1959	10月1日 天守閣再建 金鯱復元	
昭和42年	1967	3月14日 大蔵省から金塊返還 造幣局東京支局で受領	
昭和43年	1968	9月 市旗冠頭完成	
昭和44年	1969	9月 金茶釜完成	
昭和59年	1984	9月29日～11月25日 名古屋城再建25周年記念名古屋城博覧会二之丸広場内で復元両鯱公開 鯱昇降はヘリコプター 11月～12月 復元鯱修理(鱗洗浄・研磨 本体錆落とし・漆塗装)	
平成17年	2005	3月19日～6月19日 新世紀名古屋城博覧会二之丸広場内パビリオンで復元両鯱公開 昇降はクレーン	
平成17年	2005	3月24日 愛地球博会場開会式で復元両鯱公開 その前後で鯱洗浄・市民による磨き上げ	
令和3年	2021	3月20日～4月2日 名古屋城金鯱展(名古屋城二之丸広場)で復元両鯱公開 昇降はヘリコプター	
令和3年	2021	4月10日～7月11日 名古屋城金シャチ特別展覧(名古屋市中区栄)で復元両鯱公開	
令和3年	2021	7月 復元鯱修理(表面のみ。金板欠損部に貼り付け等)	



2 名古屋城天守南鯨 ガラス乾板
昭和 12～13 年撮影
名古屋城総合事務所蔵



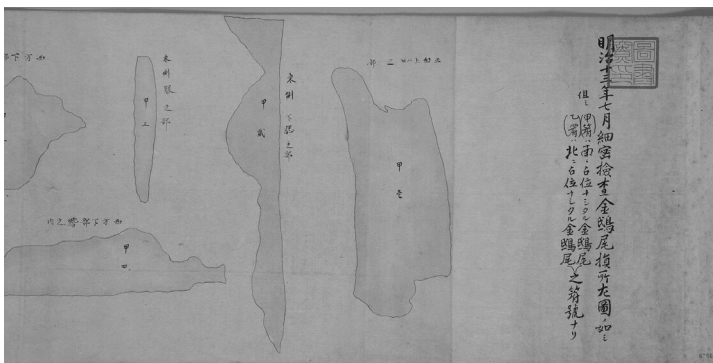
1 名古屋城天守北鯨 ガラス乾板
昭和 12～13 年撮影
名古屋城総合事務所蔵



4 金鯨復旧銘板 裏
明治 12 年
名古屋城総合事務所蔵



3 御天守鯨木地仕口寸尺之図
文政 10 年
名古屋城総合事務所蔵



5 名古屋城金鷄尾損所調査図
明治 13 年
名古屋城総合事務所蔵



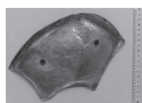
7 (名古屋城金鯰) (南鯰) 明治4年
徳川慶勝撮影 徳川林政史研究所蔵【367】



6 (名古屋城金鯰) (北鯰) 明治4年
徳川慶勝撮影 徳川林政史研究所蔵【370】



9号



挿図1 徳川林政史研究所蔵(名古屋城金鯰)
【367】と現存金鯰鱗9号



8 金鯰鱗 9号
名古屋城総合事務所蔵
藤原吉希撮影



10 文部省博物館主催博覧会湯島聖堂会場
金の鯰と男性 明治4年2月
横山松三郎撮影 東京都江戸東京博物館蔵



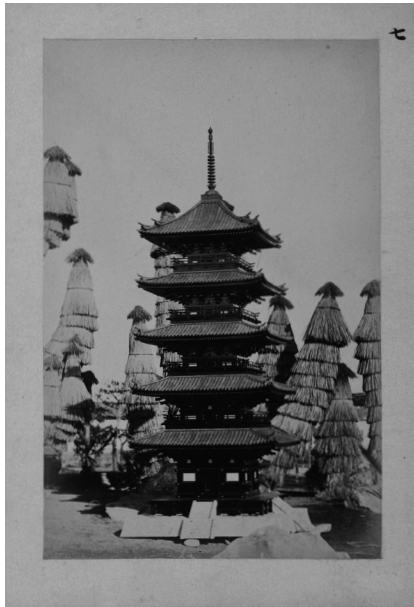
9 湯島聖堂博覧会関係者写真 明治4年2月
横山松三郎撮影 東京国立博物館蔵



12 (六 名古屋城金鯱) 『奥国維府博覧会出品撮影』1 乙本 明治5～6年
横山松三郎撮影 東京国立博物館蔵



11 貢納名古屋城天守金鯱
徳川慶勝撮影 徳川林政史研究所蔵【378】



14 (七 五重塔雛形) 『奥国維府博覧会出品撮影』1 乙本 明治5～6年
横山松三郎撮影 東京国立博物館蔵



13 (六番 名古屋城金鯱) 『奥国維府博覧会出品撮影』2 甲本 明治5～6年
横山松三郎撮影 東京国立博物館蔵



(15 「山下門内博物館表門」 門内 拡大)



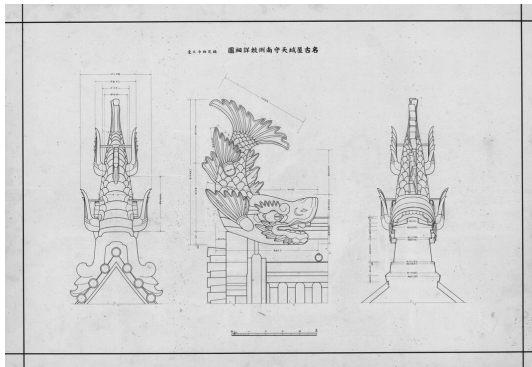
15 「山下門内博物館表門」 明治7年
和田一郎撮影 東京国立博物館蔵



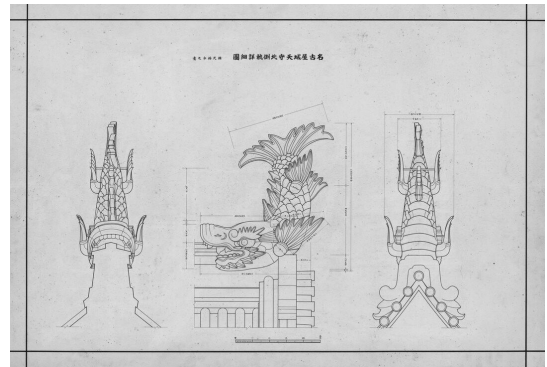
17 (山下門内博物館の北鯨)
明治 11 年撮影
東京国立博物館蔵



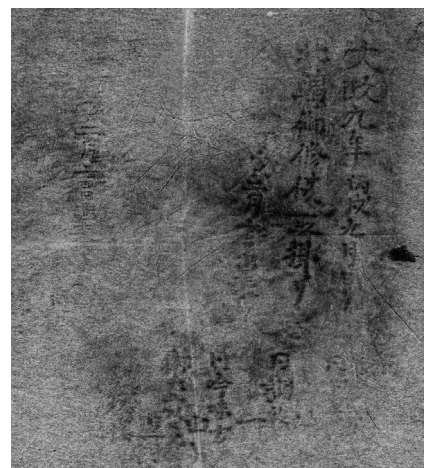
16 「ウィーン万国博覧会の日本展示会場」
1873 年
J.LÖROY 撮影 東京国立博物館蔵



19 昭和実測図 名古屋城天守金鯨 南鯨
昭和後期 名古屋城総合事務所蔵



18 昭和実測図 名古屋城天守金鯨 北鯨
昭和後期 名古屋城総合事務所蔵



20 北鯨修理拓本
文政 10 年 名古屋城総合事務所蔵
城野誠治撮影 (蛍光・左右反転)